20.　人口減少社会における防災

今や人よりも貨物が対象となる時代であるということを、ある鉄道にかかわる人から聞いたことがあります。だからといって、貨物だけを対象に強化するわけにはいかないのは、いまは鉄道事業の有事を含めての未来戦略を構築する中にいるのだということです。

確かに人口が減少している状況は社会構造の変化にも現れていて、これまでのやり方を続けていくことは不合理です。そして、効率も悪く未来年表を作り直して新たな構想をしなければ、時間が経過するだけであり、先延ばしは何の利益も生まないということになります。防災という視点でも、これまでの延長上で、財政難を無視してのハード対策を遅々と進めていくだけでは緊急時の対応にはならないと思います。ダムを造り、堤防を延長したりかさ上げしたりするだけでは追いつかないことは、財政的にも構造物の工学的な保全の意味からも明らかなことです。これからは、これまでとは異なる社会環境を見据えた新しい構想をしていく必要があります。

日常の忙しさにかまけて、大事なことを見過ごしていると、いざ何か起きても間に合わないどころか再起不能の一大事になることは目に見えています。そのためには、ハードはワンクッション、ソフトが機能するまでの予備的なものというシステムへの変換が必要となります。つまり、あらゆる場面でのリスクコミュニケーション的な考えを身につける必要があると思います。リスクコミュニケーションというと難しいツールのようですが、わが身に起きるであろうことを想定できる勘を養うということで、日常の生活をする上でも、特に情報社会であるが故に必要となることです。つまり、専門家まかせから脱却して自らが備えるべきことということにもなります。身の回りには多くの不都合なことがあることは重々承知しています。そして、それへの備えもある程度はしているつもりでも、たとえば災害でも様々なものがあって、すべてのことへの対応ということにはなっていませんし不可能なことです。

何かがあれば、頼りになるのは、これまでの知識だったり経験、マスメデイアからの情報、ＳＮＳ、友人や知人からの情報だったりしますが、その正確性とか的確性というとなかなか判断が難しく、自分の都合の良いものを選択して行動するというような危険性も潜在します。まずは、災害大国に住んでいるということを認識して、災害の履歴や発生の可能性について正確な知識として認識する必要があります。

その初めは、民間の実績を活用しての学校教育ではないかと思います。その中で、様々な体験を聞いたり、身近なことに反応させて自ら発見するという実践的なことが大変重要なことになると思います。高齢化と人口減少する中で、いかにして共助を構築して公助を機能化させるのかにかかっているともいえると思います。